

第13回 山岳遭難事故 調査報告書



2016/6/26

文責 青山千彰

事故と登山倫理

登山者の意識について

2016年5月22日、東京にて、登山倫理シンポジウムが開催された。その目的は、登山に関係した様々な領域(例えば;安全登山や、自然保護のあり方)において、生じる問題の受容性について、登山者の共通理解から得られる考え方や姿勢、原則を示す「登山倫理」の普及と検討にあった。

登山倫理は登山者として、あるべき姿を定め、それを努力目標とするものである。したがって、あるべき状態(受容範囲)から大きく離れてしまうと、間接的にしろ、事故原因になる可能性が高くなる。

登山倫理で重視される価値基準に「自立性」

冒険」「安全*」がある。事故を防ぐには、どのような山域の登山でも、この原則を持ち続けるべきであろう。しかし、現実にはそうはいかない。

アルパイン登山からクライミング、縦走、ハイキング、観光登山と、安全性のイメージが増すにつれ、当然のごとく、安全意識が薄れていく。100mの断崖絶壁の横を歩く緊張は、数mの岩を歩く者にはない。この意識の落差が事故を呼び込んでいる。

2791名の登山事故データベースが語る事故特性は、大半の事故の特徴が、明らかに危険な場所での事故が少なく、一見安全な場所で発生するというものである。

*安全はUIAA倫理規範にはない



冒険性

安全イメージの増加

安心感の増加

いぜん、我国の登山事故は右肩上がり増加し続け、公益法人として、模範を示し、減遭難に対応すべき日山協でさえ、それに上回る勢いで増加し続けている。

日山協での事故急増は、山岳共済会／ハイキング部門の影響が大きい。登山部門より安全と考えられるハイキング会員の事故数増加。これは、安全登山への姿勢、意識の違いが強く作用していると推測している。

安全登山への意識問題の対処方法は、非常に難しいが、この「基本的な登山のあり方」を問い直すためにも、ベースとなる考え方として、登山倫理を必要としている。

山岳三団体

(日山協、労山、jRO)における事故の経年変化



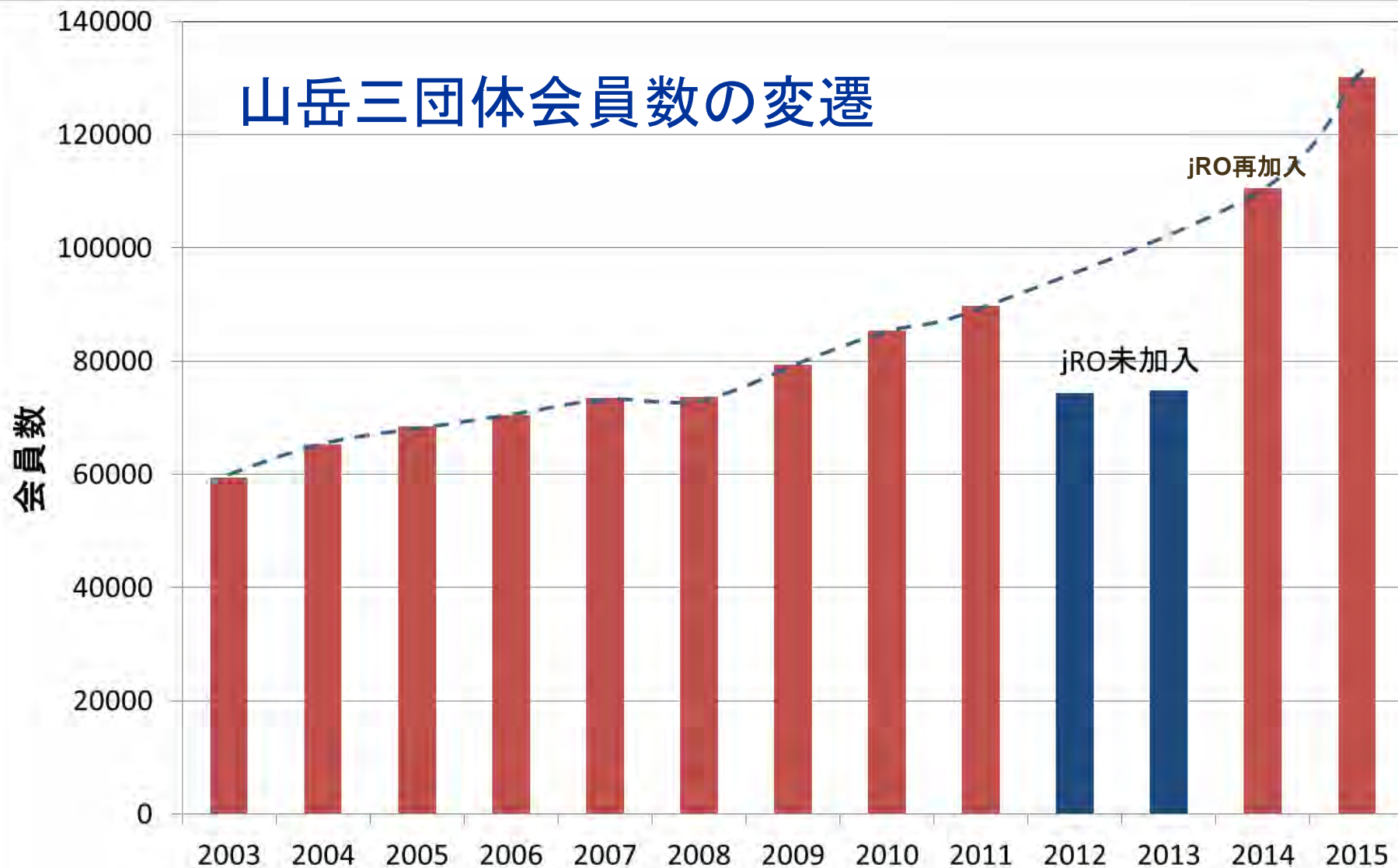
急速に大衆登山団体化する日山協

- 日山協の会員数は共済会ハイキングにおいて急速に増加しており、それに伴う、事故も同じ傾向を示している。
- その増加速度に従来の安全登山指導法による遭難対策が追いつかなくなってきたのか、対応が取れなくなってきたのか。 急ぎ検討が求められる時期になっている。
- 一方、労山は会員数に殆ど変動は見られないため、事故者数も殆ど変動が見られない

2003-2015	年度	会員数	事故者数	死亡者数	アンケート回答数	回収率(%)	対会員事故比 1:x	対会員死亡比 1:x	死亡/事故者(%)
日山協、労山、都岳連共催	2003	59428	528	23	199	37.7	112	2584	4.4
日山協、労山、都岳連共催	2004	65238	420	11	169	40.2	155	5931	2.6
日山協、労山、都岳連共催	2005	68430	446	28	96	21.5	153	2444	6.3
日山協、労山、都岳連共催	2006	70417	479	31	230	48.0	147	2272	6.5
日山協、労山、都岳連共催	2007	73448	516	24	211	40.9	142	3060	4.7
日山協、労山、jRO	2008	73668	527	22	247	46.9	139	3349	4.2
日山協、労山、jRO	2009	79390	530	37	156	29.4	149	2146	7.0
日山協、労山、jRO	2010	85454	574	18	196	34.1	148	4747	3.1
日山協、労山、jRO	2011	89751	628	21	214	34.1	142	4274	3.3
日山協、労山	2012	74405	613	18	214	34.9	121	4134	2.9
日山協、労山	2013	74835	703	31	220	31.3	106	2414	4.4
日山協、労山、jRO	2014	110516	850	38	221	26.0	130	2908	4.5
日山協、労山、jRO	2015	130111	940	37	222	23.6	138	3517	3.9

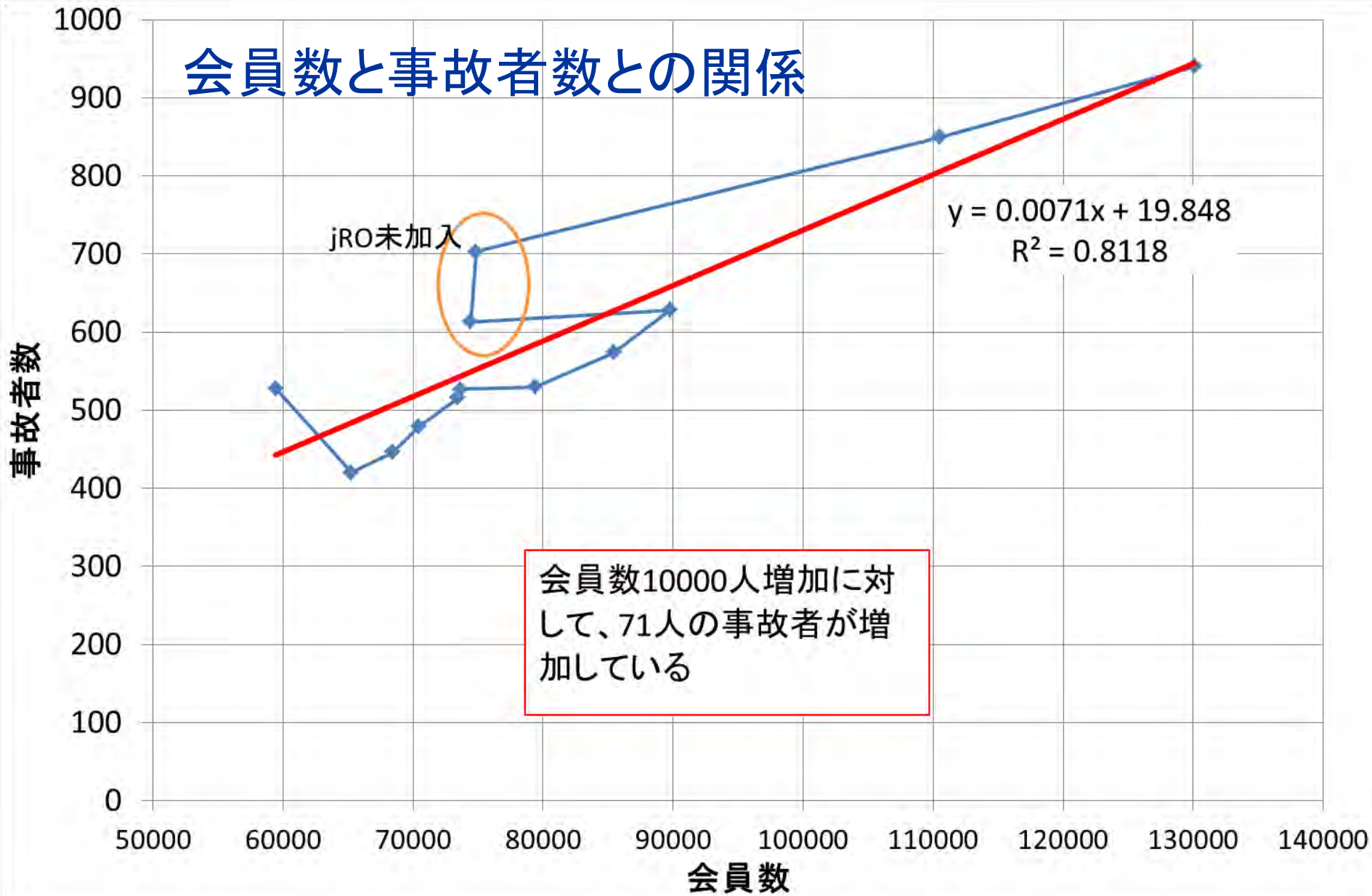
会員数は13万人、事故者数940人と共に増加し、警察事故データの1/3となった。このままでは、来年度中に1000人を超える予想。

山岳三団体会員数の変遷



山岳3団体会員は確実に増加し、特に、2014年付近より急増の傾向を示している

会員数と事故者数との関係



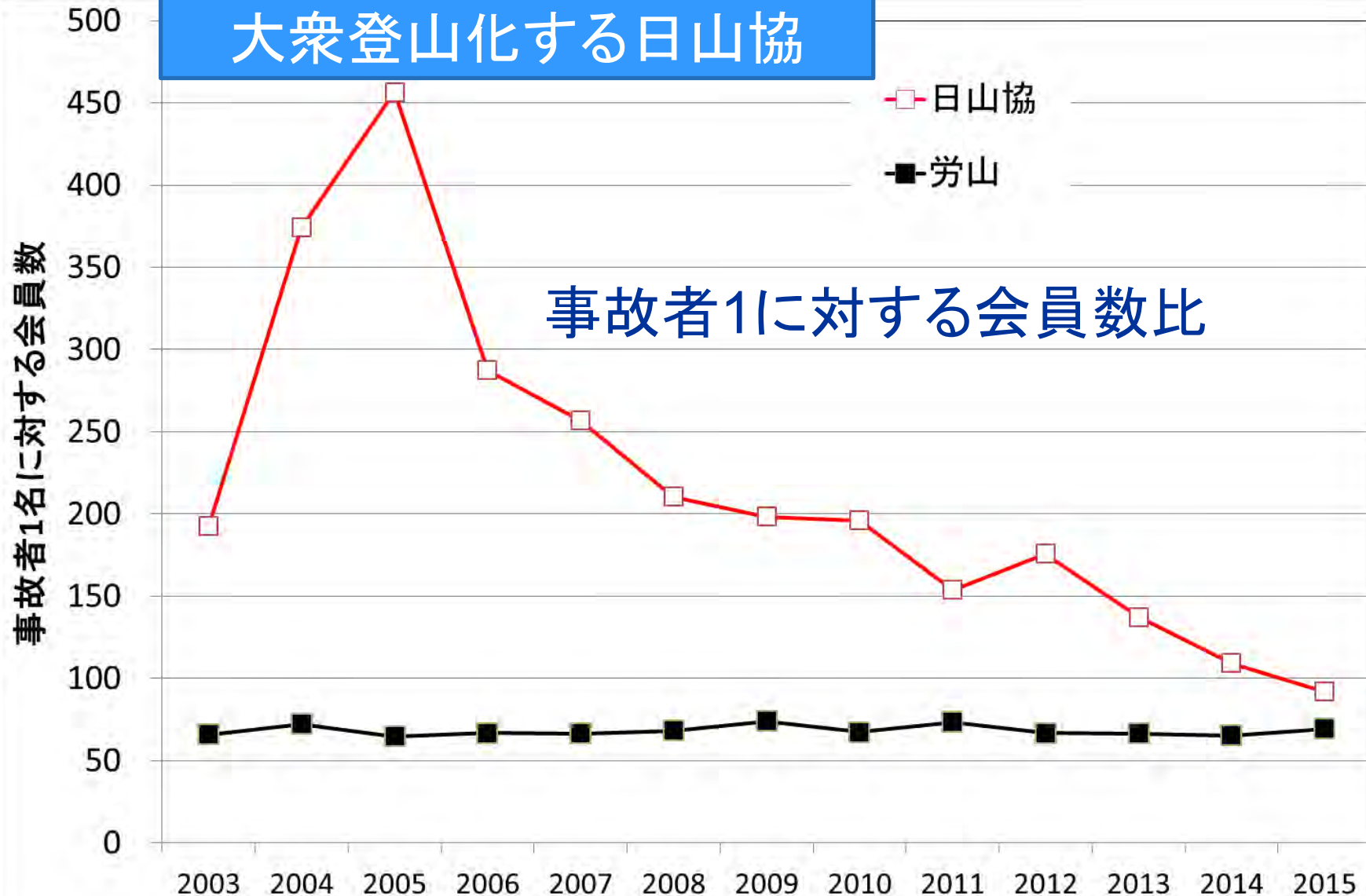
会員数と事故者数との関係は、明確な線形関係を示している。そのため、会員数が1万人増加すると約70人事故者が増加する

日山協事故者数の経年変化



日山協の事故者数は会員増につれて、増加し続け、2012年以降は年間100人単位で増加している。特に、山岳共済のハイキングの割合の影響が大きい。

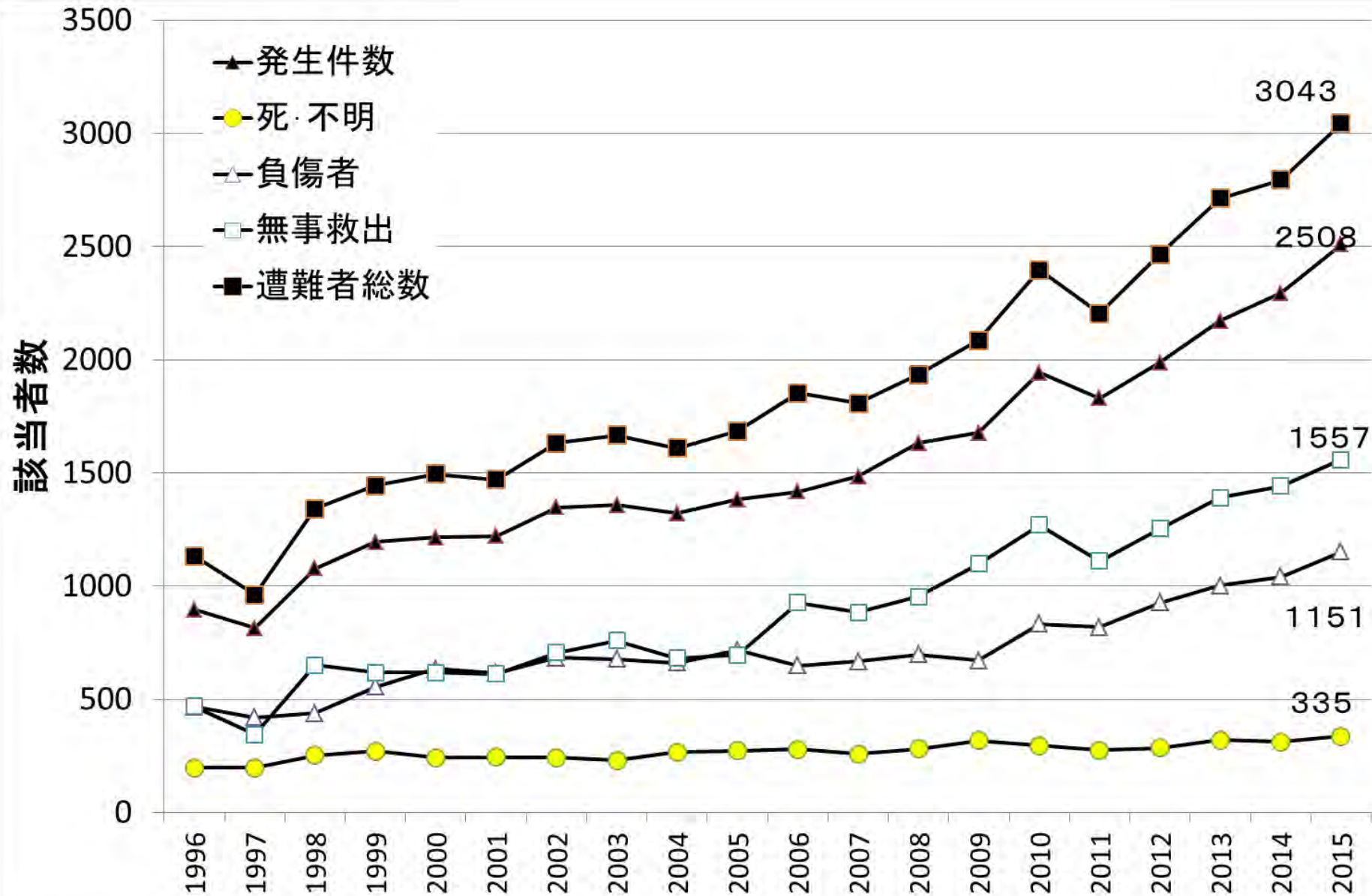
大衆登山化する日山協



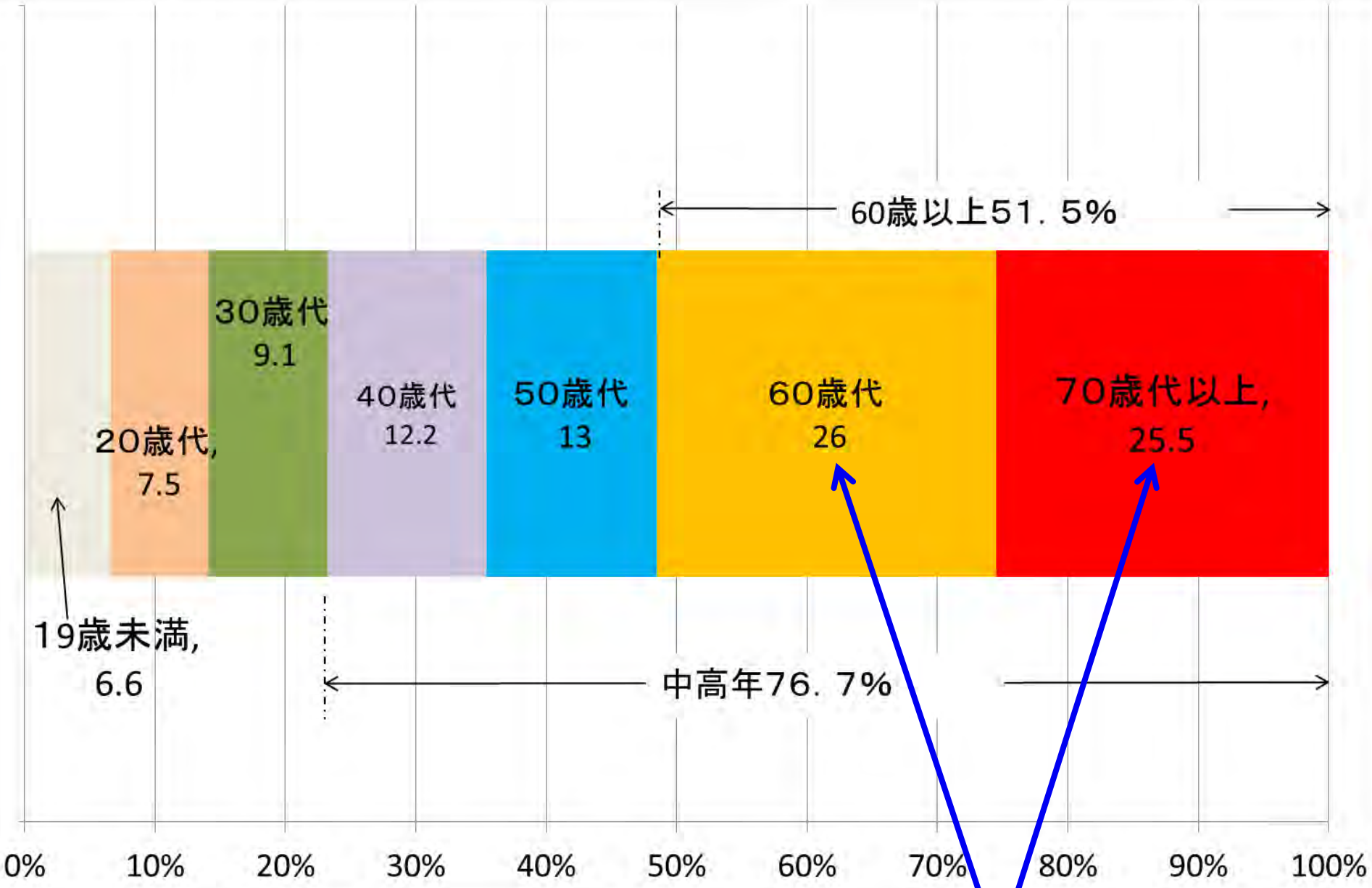
事故者1名に対する会員数の比率は、その差が最も大きかった2005年から、急速に縮まり、ほぼ同じとなった。両者の体質が同じとなったと解釈すべきか？

2015年 警察庁の事故データ

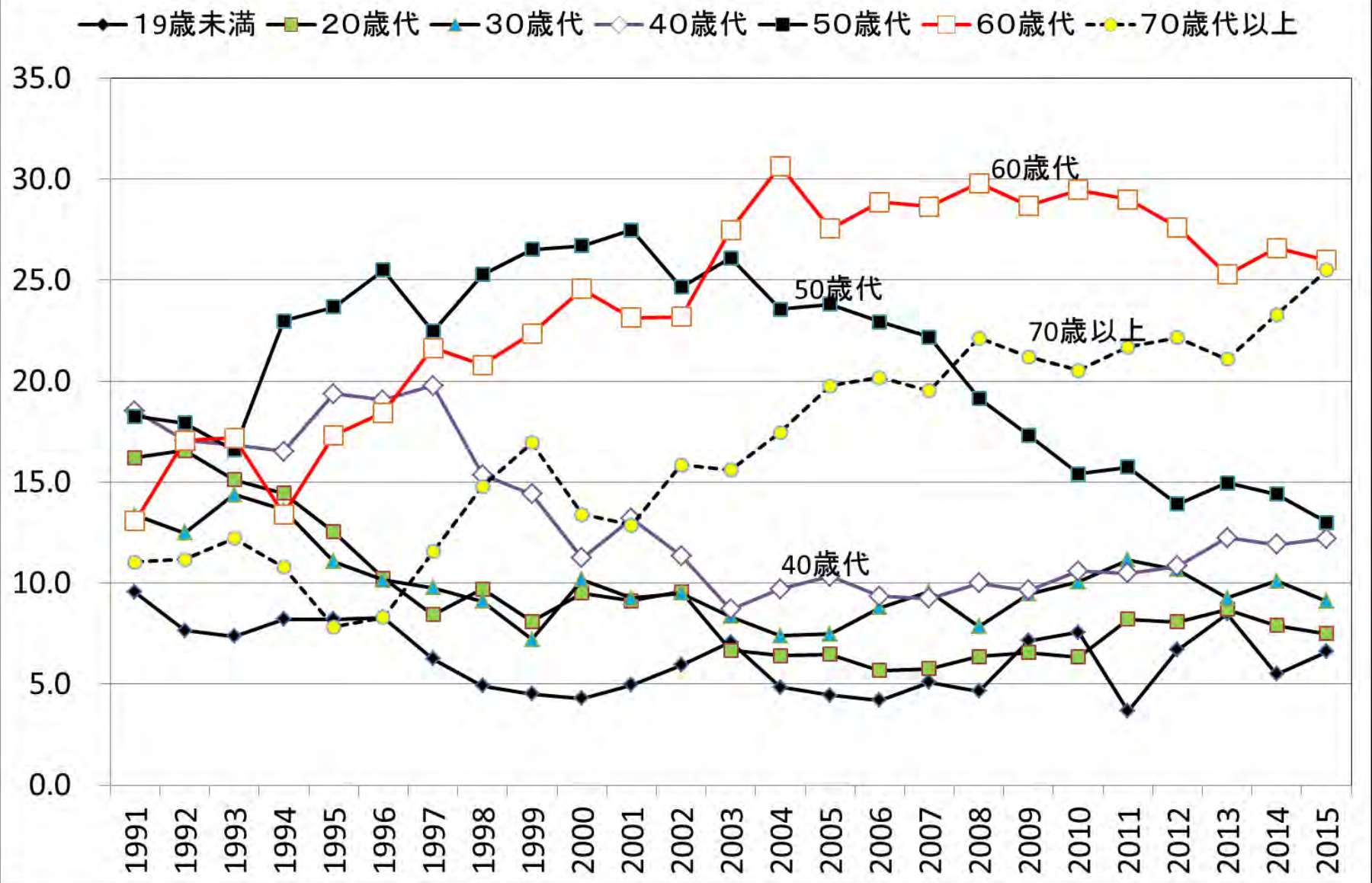
本データは、毎年6月末に公表される警察庁の事故統計を基に、再分析後・データ加工したものである。



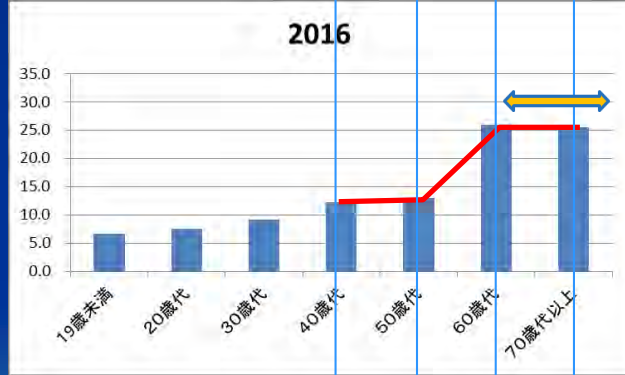
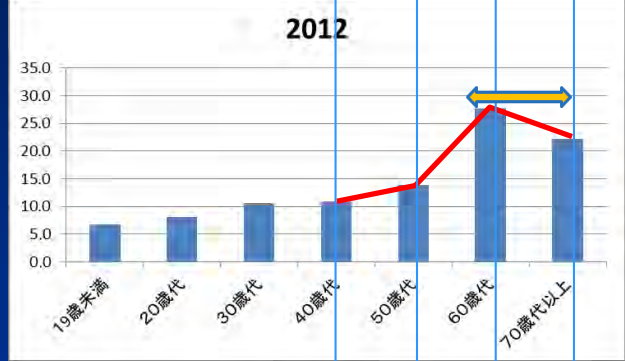
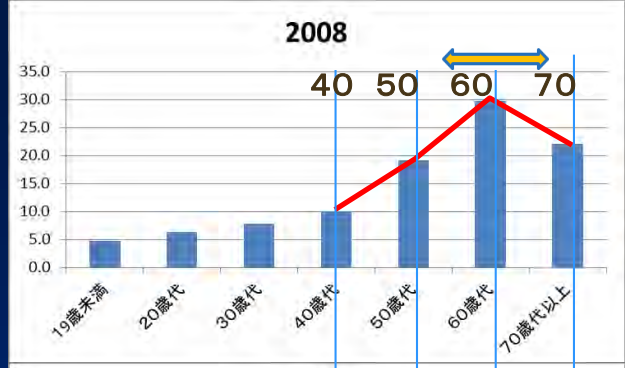
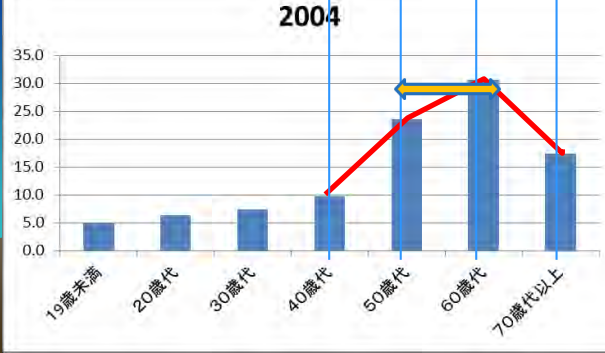
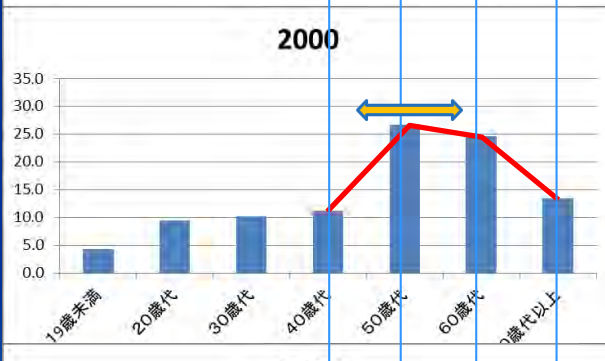
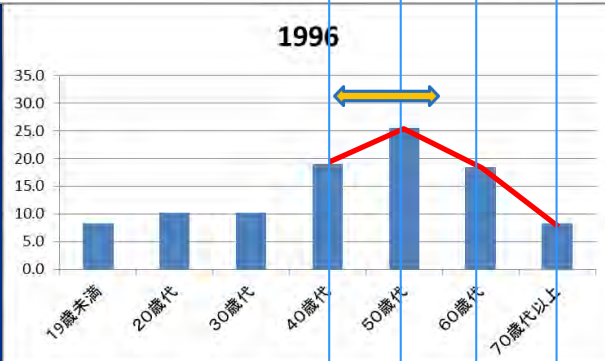
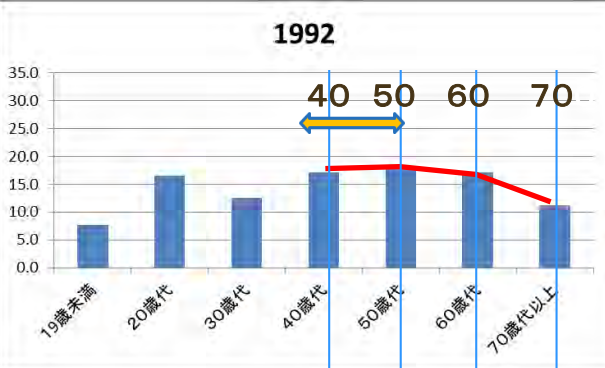
遭難者総数は3000人を超えた。遭難者の急増は2009年より始まり、途中震災の影響はあるが、約250人のペースで増加し続けている。



終に60歳世代と70歳以上の世代分布が等しくなった。



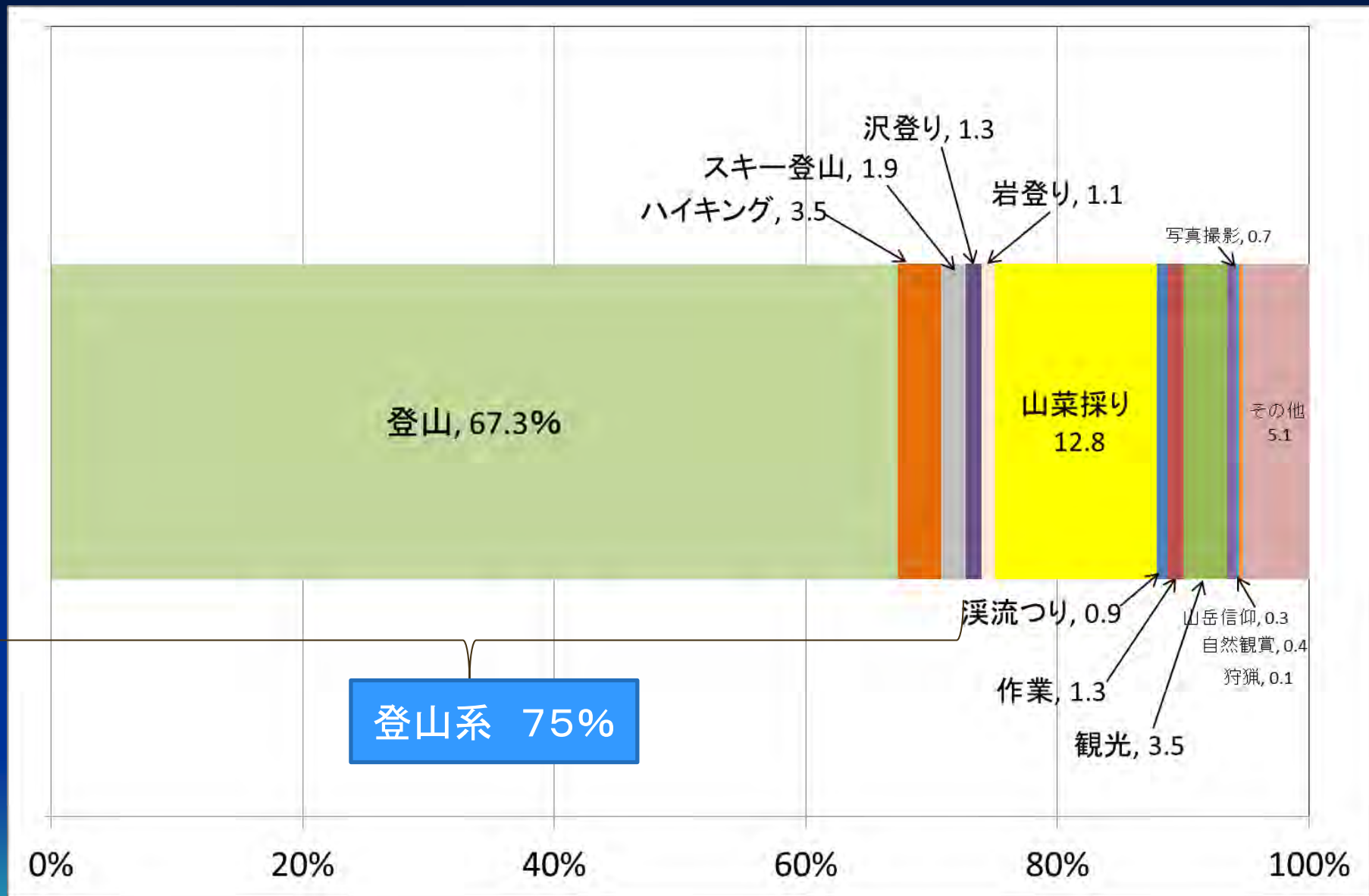
事故者の世代変化に着目すると、60歳と70歳以上の分布が等しくなり、来年度から、70歳以上がピークとなる逆転現象が生じると予想される。高齢者登山時代を明確にしめしている。



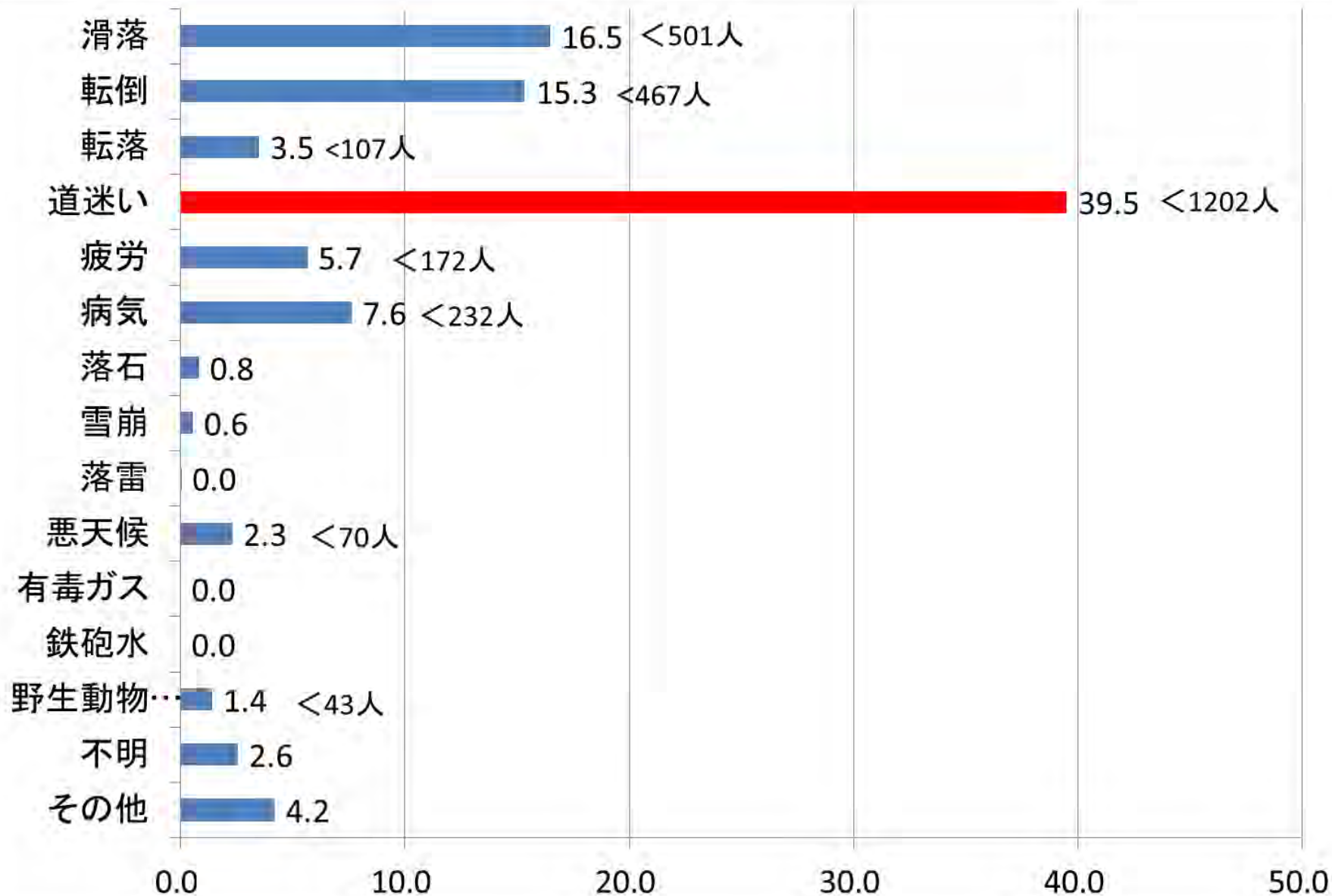
高齢化する登山団塊世代

昭和15年～昭和30年(1940-1955)生まれ

図中 は団塊の年齢幅を示す

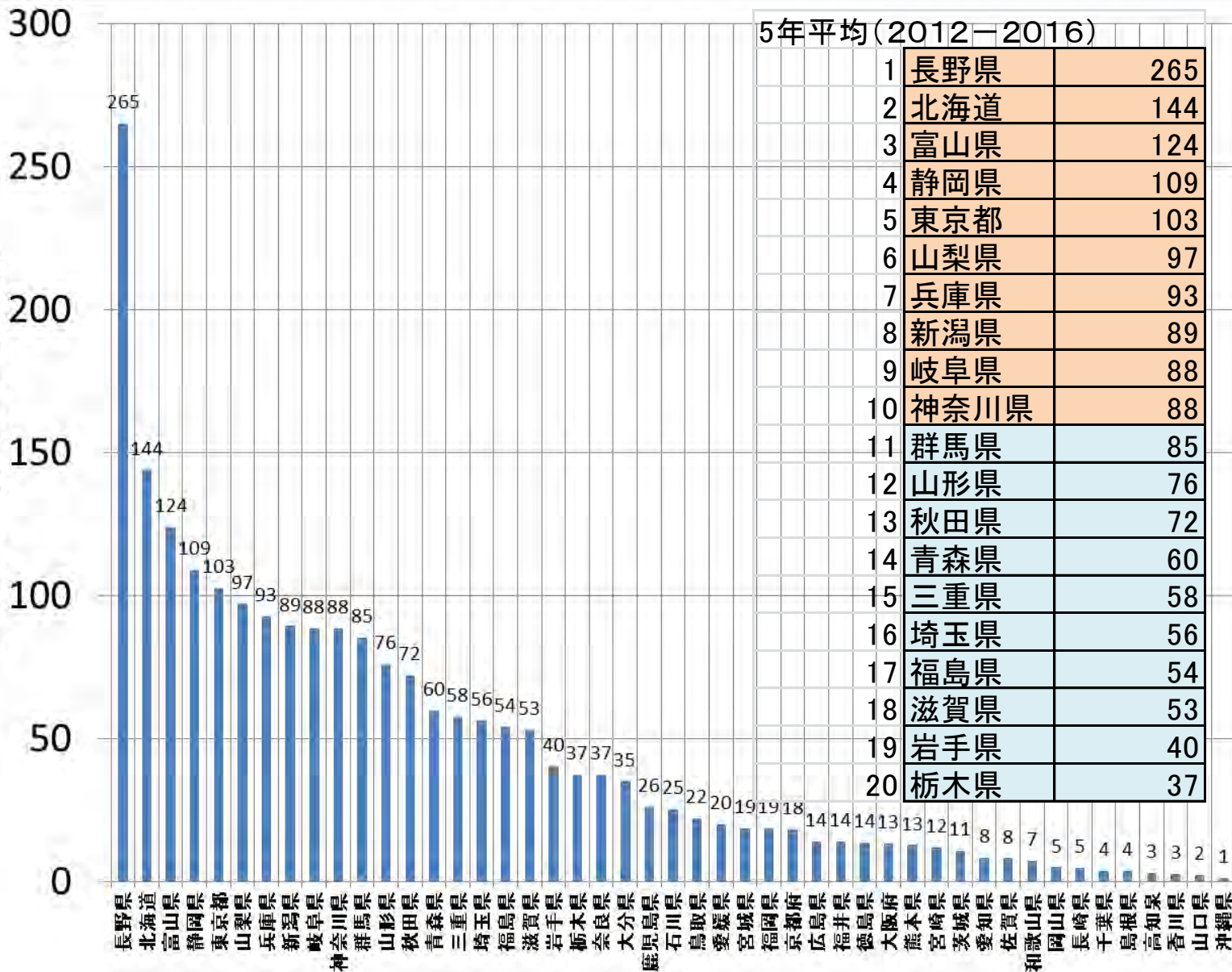


登山目的から見ると、3/4が登山系事故、1/4がその他となる。
 山菜採り(309人)はその大部分が道迷いと推測され、道迷い1202人中、約1/4が山菜採り



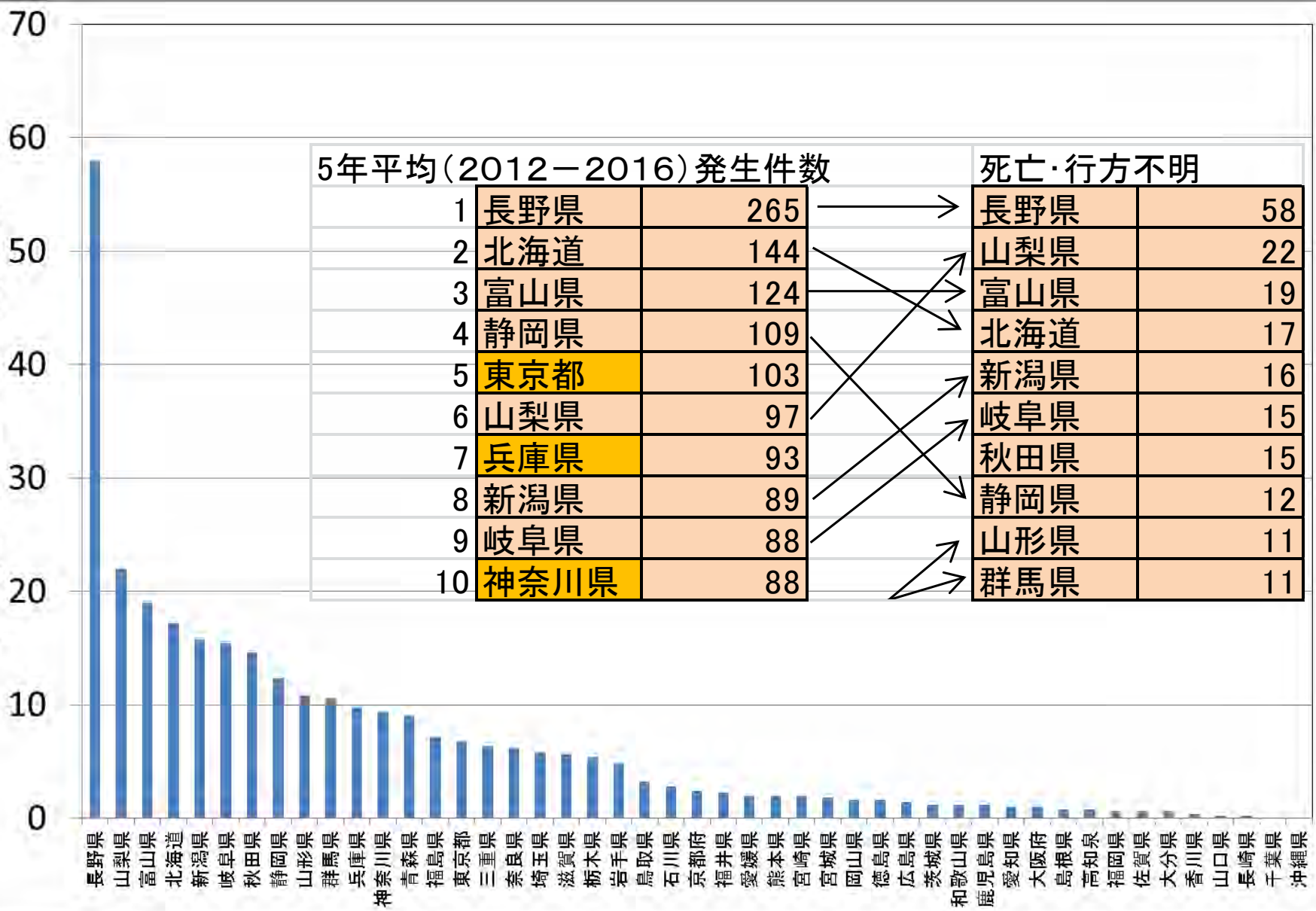
昨年度より249人の増加で、野生動物襲撃、滑落以外に全項目で増加を示している。事故態様の傾向は昨年と概ね変わらず、道迷いが突出している。

5年間平均県別事故件数



5年間(2012-2016)平均で見る、県別事故発生件数。
 トップ10にはアルプスと都市近郷山地がならぶ

5年間平均死亡・行方不明者数



県別発生件数の順位と死亡・行方不明者数の順位を比べると、東京・兵庫・神奈川などの都市近郷型の山系の特徴がよく現れている。

山岳遭難事故データベース からの解析

2016年6月現在、事故データは新しく
247人分が加わり、総計2791人のデー
タが登録された。

日山協97人、労山134人、jRO16人



新規登録事故者247の特徴

新規登録された247名は60歳代が45%、70歳以上が23%を占め、併せて60歳以上が68%となる。警察データより、高齢化している。

事故は右表IICより、死亡2、重体31となり、IIC3以上のケースに56%もいる。

IIC	女	男	総計
0:無傷	1	1	2
1:軽症	31	21	52
2:中症	27	27	54
3:重症	67	39	106
4:重体	14	17	31
5:結果死亡		1	1
6:即死		1	1
総計	140	107	247

IICはUIAAの障害の影響度を表すパラメータ

	女	男	総計
20-29	1		1
30-39	3	6	9
40-49	11	10	21
50-59	28	20	48
60-69	69	41	110
70-79	27	28	55
80-89		2	2
無効	1		1
総計	140	107	247

今回報告のあった、2名の死亡原因は急性心不全、肺水腫疾患によるものであった。

ともに、仲間、医療者により人工蘇生が処置されているが、回復しなかった。

2568では、ヘリ救出(40分程度)、良く慣れたルートで、当日の天候は問題なく、事前問題もない。

2749では、ヒエ平登山口から信濃大町を5泊で縦走する計画であった。当日の事前問題などは報告されていないが、環境問題はなかった。槍が岳山荘内で発症？医療者による処置を受けている。

	複数回答可
登山目的	件数
山スキー	17
山歩き	163
縦走	104
アルパインクライミング	22
沢登り	24
アイスクライミング	7
フリークライミング	17
観光	32
山菜採り	12
溪流釣り	3
写真撮影	11
山岳信仰	1
狩猟	0
キャンピング	2
仕事	0
その他	11

登山系	63%
クライミング系	16%
その他	17%

	複数回答可
事故原因	件数
滑落	48
転倒	138
墜落	11
道迷い	14
疲労	12
発病	1
落石	4
雪崩	0
落雷	0
悪天候の為の行動不能	5
有毒ガス	0
鉄砲水	0
野生動物・昆虫の襲撃	1
不明	7
その他	20

登山の大半は複合目的で山行中に事故に遭遇している。登山系、クライミング系、その他の割合は、警察資料に類似した割合となっている。事故の原因は、道迷いは少なく、大多数は滑落と転倒が占める。

地域データ利用の試み

- 2791人の事故情報は、遭難対策を検討する上で、非常に貴重なデータであるが、十分に利用されているとは言えない。イギリスでは、各地方ごとに、事故データを小冊子として発刊し、一般登山者への啓蒙活動に利用されている。
- 今回、3タイプの登山域（都市近郷型、遠征登山型、岩稜型）において、試験的に、該当県の出身者が他府県で起こした事故ならびに該当県内で発生した事故について抽出した資料を提供し、その利用法について検討することにした。

提供資料事例 < 事故概要と遭難現場

事例<事故概要>

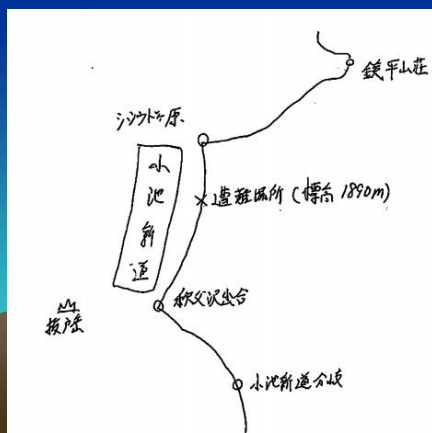
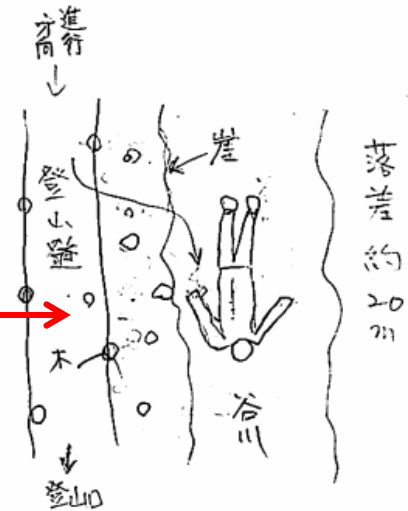
時20分, IIC=2, 障害

を残さず生存

- [目的] 山歩き, [発生地点] , 3/4
- [診断] 脳挫傷による急性硬膜外血腫, [類型] 外傷=骨折,
- [部位] 後頭左/首左, [既往症] なし
- [リスク] 冬山登山としての準備/軽い日帰り登山, 日帰り, ルート経験良く登ったルート1/一回;
- け1, 登山届け出した
- [経験] 登山(11)北岳, クライミング(), 冬山(8)入笠山(長野県)
- [天候] 曇り, 微風///, 10度
- [場所の状況] コース内=斜面沿いの道/樹林帯/植生=枯葉/土=一般土/岩=固い岩,,, やや急斜面(10~29度), 下り
- [事前問題], [日程の消化] 予定より早く到着した
- [態様] 滑落, [原因動作] バランスが崩れる/引っかかり 木の根,
- [原因詳細]
- [状態] 木の根に足をひっかけ体のバランスをくずし左前方向に回転した
- [問題] 木の根に対し足をおろす一がまずかった
- [事故後] 意識=完全に失う, 運動能力=全く動けない
- [救出処置] 処置者=レスキュー, 処置法=止血, 連絡法=携帯電話, 救出=ヘリコプター
- [行程]

以下の枠の中に遭難場所の簡単な見取り図を書いてください。

遭難現場



遭難場所のスケッチは多様な回答がある

「遠征登山型」<大阪岳連;石田

大阪には金剛・生駒山系などがあるが、事故の大多数は、他府県での事故である。今回も、13件中、大阪府発生事故は2件に過ぎない。まずは、どのような山域に遠征し、事故を起こしているのか、正確な情報を持つ必要がある。

「都市近郷型」<兵庫岳連;一本松

兵庫は都市近郷型の六項山系、雪彦、氷ノ瀬山系などがあり、地元の登山やクライミング人口も大きいいため、事故も多い。21件の事故中、県外の事故者は5名にすぎない。

「岩稜型」<群馬岳連;町田

群馬は、その大部分が上信越高原国立公園にあって三国山脈、越後山脈を有する登山県である。特に、谷川岳は、世界一の死亡者数781名(1931-2005)を記録した魔の山と呼ばれる。16名事故記録では、その谷川ーノ倉沢での事故が報告されているが、クライミング中の事故は半数に留まっている。



兵庫岳連の利用例

<担当:一本松>

ID2568 フリークライミング中での突然死。ビレイヤーが突然意識を失った場合、手を離しても有効なビレイ方法(例えばグリグリ使用)を考慮すべきか？

ID2638 ID2589 一般登山道ではない道に踏み入れる時は、基礎的クライミング技術ロープワーク技術が必要

【ID2642 【ID2655 【ID2657】 雨で濡れた斜面、荒れた斜面を下降する時は、三点支持で通過

【ID2616 ルート核心部での滑落、中間支点を構築、クライミング技術の向上、ビレイヤーの心構え等

これらの資料ならびに、過去兵庫地区で発生した事故を通じて、懸垂下降時の事故が多いとして、さらに、全国版から「懸垂下降時事故20件」を抽出し、15項目からなる「懸垂下降の手順(案)」を提案している。



懸垂下降の手順(一本松提案)

- ①セルフビレー
- ②支点の確認
- ③ロープを結合(結合部分から出ている4本のストランドを1本ずつ増締め)
必ず止め結びでバックアップ。余長は30cm程度とる
- ④結合部分を壁側にして支点に通し、どちらを引くか確認。
- ⑤ロープ末端を結合(スリーホールドオーバーハンドノット)
- ⑥フリクションヒッチでバックアップ
- ⑦ロープを下降器にセット
- ⑧セットした下降器及びバックアップシステムが機能していることを確認
- ⑨セルフビレーを解除し下降
- ⑩ラペルステーションに着いたらセルフビレー
- ⑪支点の確認
- ⑫ロープを仮固定
- ⑬ロープを試し引き
- ⑭次のメンバーが下降
- ⑮ラペルステーションに着いたらセルフビレー
- ⑯ロープの仮固定を確認後、ロープを回収

..そして④に戻る

※ 懸垂下降中、両手を離す必要に迫られた場合、直下のロープを脚部に2~3回巻きつけた後ロープにエイトノット(フィギアエイト・オン・ア・バイト)を作りビレーループに固定。

事故データベースからの 要因別抽出手順

対象；
遭対関係者ならびに
遭難事故研究者

データベースの取り
扱いはIMSARJで
厳重保管
連絡 青山

aoyamachiaki@gmail.com

主に、以下の「要覧①～⑬」
に示した各種データ表の項目
をキーワード（検索は4つまで可）
として、
データ抽出の要請をメールで
例 「低体温症、60歳代、男」

該当する抽出データを
メールで送り返す

事故情報要覧 [2791人]

- 事故データベースは、主な質問項目144に対し、535の関連因子によって構成され、現在2791人(レコード)の情報が登録されている。
- 以下①～⑬にある表にある項目(関連因子)に対する該当数を表示する。ここに示した因子を用いて、検索することで、該当する事故の概要を、取り出すことができる。
- 利用事例:「低体温症」と検索すれば27人の低体温に至る事故が抽出でき、「転倒」では1378人の事故を取り出す事ができる。勿論クロス集計も可能、例;50歳代+女性+滑落

傷害

打撲	696
裂傷	528
大出血	65
神経障害	49
脱臼	156
骨折	1542
捻挫	76

疾患

呼吸器系	20
循環器系	19
消化器系	14
泌尿器系	6
感覚器系	8
神経系	17
感染症	2
アレルギー	9

環境要因

急性高山病	6
肺水腫	4
脳浮腫	1
低体温症	27
凍傷	73
日射病	5
その他	30

① 傷害／疾患 N=2791

傷害部位

頭部		体幹部		上肢部		下肢部	
前頭左	89	胸左	115	上腕左	80	大腿左	92
前頭右	67	胸右	89	上腕右	88	大腿右	72
後頭左	61	腹左	26	肘左	77	ひざ左	263
後頭右	56	腹右	28	肘右	67	ひざ右	233
ひたい左	99	肩左	100	前腕左	86	下腿左	161
ひたい右	82	肩右	120	前腕右	72	下腿右	161
目左	40	背中左	73	手首左	230	足首左	365
目右	43	背中右	81	手首右	188	足首右	342
ほほ左	74	腰左	117	てのひら左	40	足左	60
ほほ右	71	腰右	101	てのひら右	39	足右	48
耳左	12	でん部(尻)左	74	手の甲左	43	足裏左	24
耳右	18	でん部(尻)右	67	手の甲右	44	足裏右	20
あご左	44	骨盤左	44	親指左	55	足の甲左	29
あご右	39	骨盤右	38	親指右	51	足の甲右	33
頭頂部	50	股関節左	17	人差し指左	61	足親指左	34
鼻	51	股関節右	15	人差し指右	54	足親指右	32
口	54	頸椎	78	中指左	73	第二指左	19
歯	63	胸椎	43	中指右	87	第二指右	20
首左	57	腰椎	77	薬指左	82	第三指左	18
首右	52			薬指右	84	第三指右	21
				小指左	77	第四指左	18
				小指右	64	第四指右	22
						第五指左	21
						第五指右	26

医師の診断名は、検索可能、表記法が統一されていないため、ある程度は抽出できるが精度悪し

②パーティ構成、基礎体力、登山目的

N=2791

役割

リーダー	533
サブリーダー	286
メンバー	1426
役割を決めず	289

老眼の程度

楽に読める	1312
目を凝らすと読める	1175
全く読めない	70

聴力

問題なく聞こえる	2436
少し聞こえづらい	215
全く聞こえない時がある	11

最大過般能力は数値記録

登山経験は自由既述記録

登山目的

山歩き	1551
縦走	1048
山スキー	224
アルパインクライミング	381
アイスクライミング	104
フリークライミング	230
沢登り	424
観光	445
山菜採り	118
溪流釣り	40
写真撮影	174
山岳信仰	10
狩猟	2
キャンピング	34
仕事	16
その他	183

③ リスク対応、装備 N=2791

装備

エスケープルートの検討

考えた	1197
どうにかなる	179
全く考えない	498

登山届け

警察	169
入山地点	608
家族	900
所属山岳会	1930
職場	63

一般

ザック	2599
地図	2269
ガイドブック	949
コンパス	2023
金	2320
文具	1851
雨具一式	2448
ナイフ	1812
軍手	1783
着替え一式	1667
靴	2124
ビニール袋	2237
予備乾電池	1755
ストック	1566
救急医薬品	2195
カメラ	1576
双眼鏡	92
ラジオ	527
携帯電話	2217
無線	339

冬期

アイゼン	648
ワカン	142
スキー用具一式	142
ピッケル	402
ゴーグル	348
防寒具(下着含む)	1177
帽子	1524
プラスチック靴	195

ギア

ロープ	1060
ヘルメット	767
ハーネス	835
カラビナ	1219
ハーケン	326
ナッツ	164
確保器	699
下降器	563
スリング	996
ハンマー	278

野営、夜間

テント一式	486
シュラフ	635
コンロー式	956
コッヘル	921
ヘッドランプ	2013
ツェルト	895
シュラフカバー	568

④ 事故直前問題

N=2791

予定遅れの仕事への影響

非常に深刻	124
あまり問題はない	565
全く問題はない	488
関係なし	677

予定の日程をこなしたか

予定通り	2002
予定より早く到着した	185
予定より少し遅れてた	309
予定より大幅に遅れてた	107
予定はない	47

事故前日までの疲労

非常に疲れている	32
少し疲れている	384
普通	1837
快調	405

事故直前問題

悪天候	86
悪天候ガス	97
悪天候風雨	158
悪天候積雪	104
道迷い	108
登山道	68
登山道消失	15
登山道荒廃	86
器具	13
器具破損	14
器具携帯の忘れ	2
交通機関の問題	8
本人を含むメンバー	12
本人を含むメンバー不和	6
本人を含むメンバーケガ	31
本人を含むメンバー体の不調	83
本人を含むメンバー役割変更	10
予定変更	47
予定変更ルート変更	48
予定変更目的変更	16
その他	468

⑤ 事故原因、環境(天候) N=2791

事故原因

滑落	620
転倒	1378
墜落	182
道迷い	91
疲労	129
発病	35
落石	76
雪崩	18
落雷	5
悪天候の為の行動不能	50
有毒ガス	1
鉄砲水	5
野生動物・昆虫の襲撃	28
不明	33
その他	307

天候

快晴	420
晴れ	1280
曇り	687
雨	307
雷雨	3
ひょう	1
あられ	6
みぞれ	26
雪	75
吹雪	71
霧	300

微風	1321
少し強い風	181
かなり強い風	88
強風	57

にわか雨	179
少し強い雨	97
かなり強い雨	29
豪雨	5

にわか雪	84
かなり激しく雪が降る	43
大雪	13

僅かにガス	186
かなり視界が悪いガス	97
何も見えないガス	17

気温は数値記録

⑥ 事故発生場所の特徴

N=2791

登山道上、その周辺

斜面沿いの道	573
尾根道	409
山頂	49
谷川に沿う沢道	151
平坦な道	176
岩山をぬう道	133
谷山を削った道	32
樹林帯	283
湿地帯	27
河床	29
雪渓	82
雪田	15
荒れ地	40
崩土地帯	46
階段	59
板橋	23
吊り橋	1
丸太橋	7
作業道	5
林道	58
ドライブウエー	1
石畳	16
線路	0
えん堤	2
堤防	1
スキー場	25

登山道外

がけ地	26
岩壁	232
水壁	14
雪壁	39
氷瀑	21
氷河	2
氷雪斜面	118
岩場斜面	96
土砂斜面	40
ガレバ	30
雪庇	12
やぶ	30
沢すじ	133
滝	60
湿地帯	5
河床	48
その他	84

斜度

ほぼ水平	287
傾斜面(0~9度)	731
やや急斜面(10~29度)	772
急斜面(30~59度)	381
壁(60度以上)	345

斜面の傾き

登り	717
下り	1572

現場の表面状態

植生

草	193
枯葉	189
根	197
コケ	81
クマザサ	64
這い松	36
やぶ	78
樹林	279

雪氷

雪道	274
氷結道	80
土の凍結	24
クレバス	13

水

河原	40
河床	32
水の越流道	8

土

泥	168
一般土	493
砂利	166
れき(こぶし大)	178
ガレバ	123
腐葉土	62

人工物

鎖	18
梯子	6
ロープ備え付け	34

岩鮮度

固い岩	536
ぼろぼろの岩	103

岩形状

スラブ	126
フェイス	166
クラック	48

⑦ 事故発生行程、直前動作と滑落・転倒誘因

N=2791

事故発生時の行程

前半(1/4行程)	594
前半(2/4行程)	471
後半(3/4行程)	953
後半(4/4行程)	499

事故直前のコンディション

非常に疲れて動けない	46
ひざが笑う	23
ひざが痛い	57
腰が痛い	26
肩が痛い	22
あえぐ	16
何も考えられない	44
普段と同じ	1847
非常に快調	276
その他	1

滑落・転倒の動作誘因

滑る	1129
バランスが崩れる	817
足・膝の障害	53
足下の確認ミス	444
足下が見えない	60
めまい	15
病気	9
疲労	61
足場が崩れた	76
引っかかり	76
引っかかり木の根	117
引っかかり岩角	71
引っかかり突起物	41
引っかかり その他	166
衝突	10
衝突人1	2
衝突岩肌	9
衝突木	27
衝突 その他	44
ザイルに引っ張られる	19
アイゼンが外れる	3
押される	6
その他	258

⑧ 事故要因

N=2791

道具の破損事故

ザック	11
登山靴	18
ステッキ	15
コンロ	1
ガスタンク	1
ランプ	2
アイゼン	0
カラビナ	2
ロープ	2
ハーネス	1
スリング	1
ハーケン	15
下降器	1
確保器	2
ヘルメット	2
その他	0

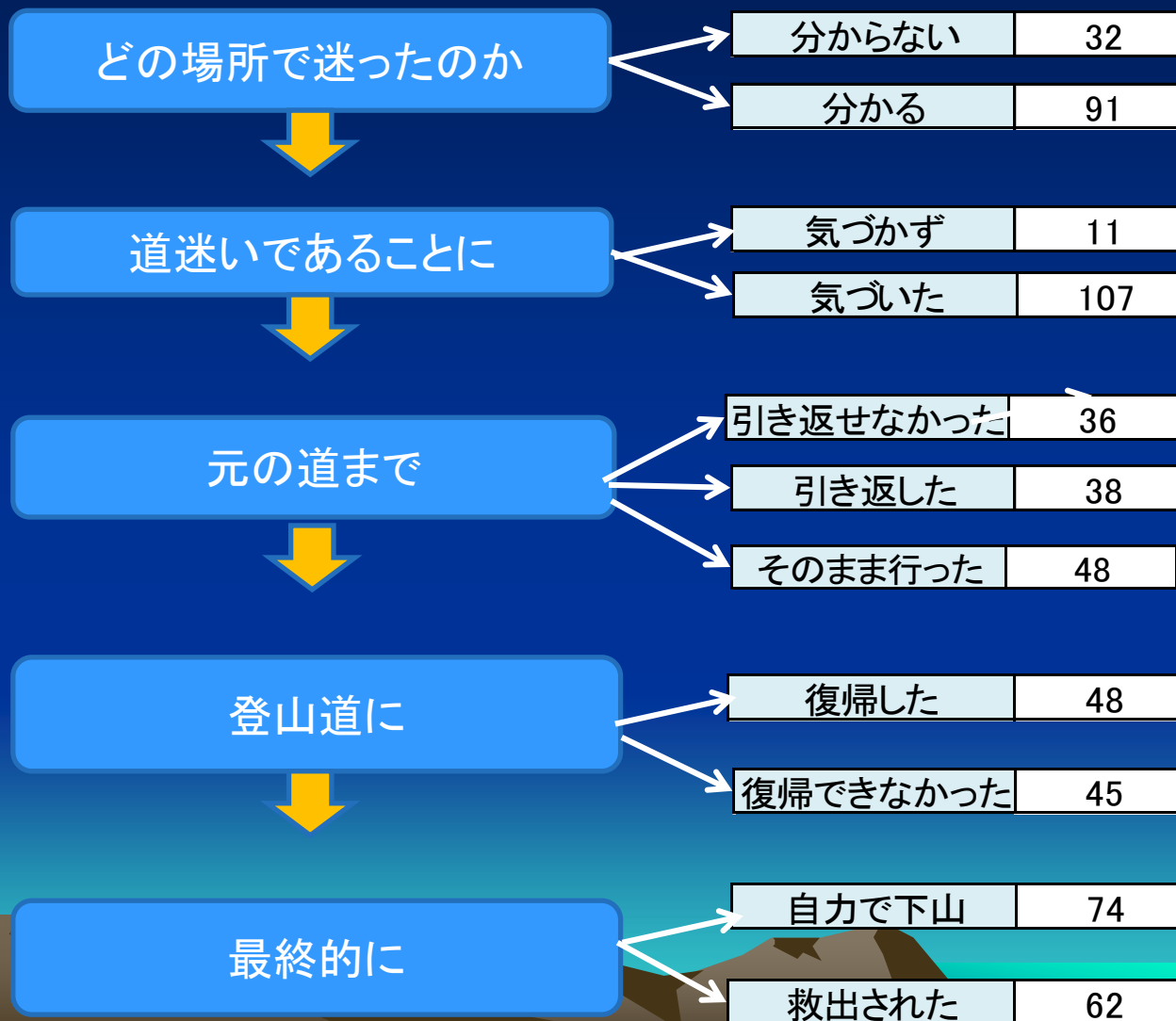
ヒューマンエラー

入力過程=場面把握	
見え(聞こえ)なかった	49
気づかなかった	199
忘れた	11
媒介過程=思考の統合	
知らなかった	12
深く考えなかった	140
大丈夫だと思った	446
感情や情動過程	
あわてた	69
イライラしてた	17
疲れてた	119
出力過程=作業行動の行重	
無意識に手が動いた	55
やりにくかった	30
体のバランスをくずした	552

動物・昆虫の襲撃

熊	2
イノシシ	3
蛇	8
野犬	0
猿	0
蜂	15
毒虫	11

⑨ 事故要因：道迷い $N=2791$



⑩ 事故後の状態、事故の発見連絡

事故直後の状態

即死状態	50
------	----

事故直後の意識

完全に失う	73
呼べば答える	62
意識あり	2081

運動障害

全く動けない	213
少しだけ動ける	197
助けがあれば動ける	274
何とか歩ける	1036
全く問題なく歩ける	738

事故後の運動拘束

危険な場所に落下し動けない状態	84
ロープに宙吊り	82
雪崩・崖崩れで生き埋め	12
落下物により拘束される	10
すき間などに挟まれる	43
その他	621

事故発見者

同行家族	91
パーティ仲間	1508
レスキュー	46
一般登山者	84
地元の人	23
留守家族・仲間からの搜索願	42

事故の連絡手段

携帯電話	815
無線	85
一般電話	89
歩いて	198
歩いて; 家族	28
歩いて; 仲間	270
歩いて; 一般登山者	32

事故の連絡先

警察	412
消防	331
山岳会	634
近くの登山パーティ	54
家族	289
その他	273

⑪

事故後の処置

N=2791

応急処置者

遭難者本人	576
パーティ仲間	1300
家族	42
一般登山者	79
レスキュー	148
医療関係者	162
地元の人	25
処置を施さず	341

処置法

止血	312
消毒	189
添え木あて	57
添え木あて手	140
添え木あて足	165
添え木あて首	4
添え木あて胸	1
人口蘇生	20
人口蘇生:人工呼吸	6
人口蘇生::心臓マッサージ	6
体位変換	72
洗浄	58
携帯薬の服用	173
注射	13
冷やす	551
暖める	129
酸素吸入	17
その他	640

⑫ 事故の影響度、救出手段、と発生県_{N=2791}

IIC	
0:無傷	9
1:軽症	466
2:中傷	616
3:重症	1254
4:重体	342
5:結果死亡	53
6:即死	50

救出手段	
ヘリコプター	454
背負われて	201
脇を支えられて	130
自分で歩いて	1082

発生県	
北海道	143
青森県	15
岩手県	23
宮城県	18
秋田県	20
山形県	38
福島県	74
東京都	80
茨城県	11
栃木県	49
群馬県	127
埼玉県	44
千葉県	1
神奈川県	78
新潟県	87
山梨県	149
長野県	556
静岡県	82
富山県	116
石川県	19
福井県	19
岐阜県	52
愛知県	9
三重県	63
滋賀県	66
京都府	39
大阪府	21
兵庫県	156
奈良県	43
和歌山県	4
鳥取県	22
島根県	1
岡山県	11
広島県	14
山口県	1
徳島県	6
香川県	5
愛媛県	13
高知県	1
福岡県	24
佐賀県	3
長崎県	16
熊本県	19
大分県	48
宮崎県	18
鹿児島県	21
沖縄県	2

⑬ 山脈、山地、連峰、半島、他

山脈系

北アルプス	468	頸城山塊	8
南アルプス	97	浅間山系	7
越後山脈	81	箱根山系	6
独立峰	64	久住山系	5
三国山脈	61	蔵王連峰	5
奥羽山脈	59	讃岐山脈	4
鈴鹿山脈	54	戸隠連峰	3
中央アルプス	47	帝釈山脈	3
大峰山脈	26	法皇山脈	3
北山山系	26	小岱山山系	2
日高山脈	24	成層火山	2
大山山系	23	安達太良山	1
九重山系	19	果無山脈	1
知床半島	16	開田山脈	1
安達太良山系	13	活火山	1
台高山脈	13	楡形山脈	1
大雪山系	11	積丹半島	1
伊豆半島	10	大台山系	1
八甲田山系	9	独立火山	1
屋久島山系	8	日光火山群	1
和泉山脈	8	比良山系	1
		両白山地	1

山地系

秩父山地	190	伊豆半島	5
六甲山地	123	真昼山地	5
八ヶ岳連峰	103	生駒山地	5
丹沢山地	63	朝日山地	5
後立山連峰	48	北上山地	5
比良山地	37	出羽山地	4
石狩山地	30	紀伊山地	3
九州山地	29	足尾山地	3
両白山地	28	天子山地	3
御坂山地	25	白神山地	3
中国山地	25	志賀高原	2
日光火山群	20	蔵王連峰	2
飯豊山地	18	大菩薩連嶺	2
筑紫山地	16	筑摩山地	2
伊吹山地	14	道志山塊	2
頸城山塊	14	北見山地	2
立山連峰	13	鈴鹿山地	2
霧島山地	11	奥秩父山地	1
四国山地	10	恐山山地	1
野坂山地	9	御坂山塊	1
夕張山地	9	身延山地	1
戸隠連峰	8	知床半島	1
八溝山地	8	南薩火山群	1
金剛山地	7	八ヶ岳連峰	1
増毛山地	7	両日山地	1

山名別は検索可能であるが、自由既述のため、検討整理中

事故調査内容改訂作業と問題点

- (1) 2002年から本格開始された事故調査は、現在、EXCELに収納されたデータ数約190万(679項目/2791レコード)となっている。
- (2) UIAA対応するために、内容の改訂が必要であるが、無制限に項目を増やすことはできず、また、項目変更すると、そこで経年情報が途絶える。いかに、旧データとの整合性つけながら変更/改訂するのか、難しい問題である。
- (3) これらのデータベースを稼働(データのコード化、精度確認、収納、検索、解析)させているために、様々なプログラミングを開発してきた。項目の変更は、全プログラミングの「変更」、「作り直し」を意味し、大変な作業時間を必要とする。
- (4) 内容の変更は、今後10年以上継続するとして、1回が限度となる。そのため、様々な専門家に検討をお願いする予定である
- (5) 当、データベースの位置づけは、山岳遭難事故の基礎データとする。それぞれの専門領域で必要とする調査項目は最小限とする。もし、専門性に応じたアンケートを必要とする場合には、別途考える
- (6) 当調査に参加する組織は、IMSARJ, 日山協と岳連、労山と下部組織、jRO UIAAをメインとし、さらに、関連学会、ならびに、安全登山活動を目指す各種登山団体を考える。

一般登山者への啓発資料

安全イメージの落とし穴



安全に見える山道に潜むもの

—すべての登山はリスクを伴う—

安全な登山は、イメージの持ち方が鍵になる事が多い。一般の登山者には、家族などへ「遭難事故は冬山、クライミングの世界の話で、自分たちは、そのような山には行かないから安心してね」と話される方が多い。

しかし、クライミングからハイキングまで、登山事故原因の大半は急峻な地形や、厳しい天候、滑りやすい場所で発生するものではなく、一見絶対に安全と思われる場所で、多発する。

安全に見える山道に潜むのは、小さな木の根の引っ張り、枯れ葉の堆積、車石、小さな段差、岩角、周囲の登山者など・・・である。これらが、極あたりまえの山の風景を作り出している。そして、穏やか天候、遠くの景色が美しい。友人・仲間とおいしい食事、おしゃべり などの誘因が事故の構図を作り上げていく。

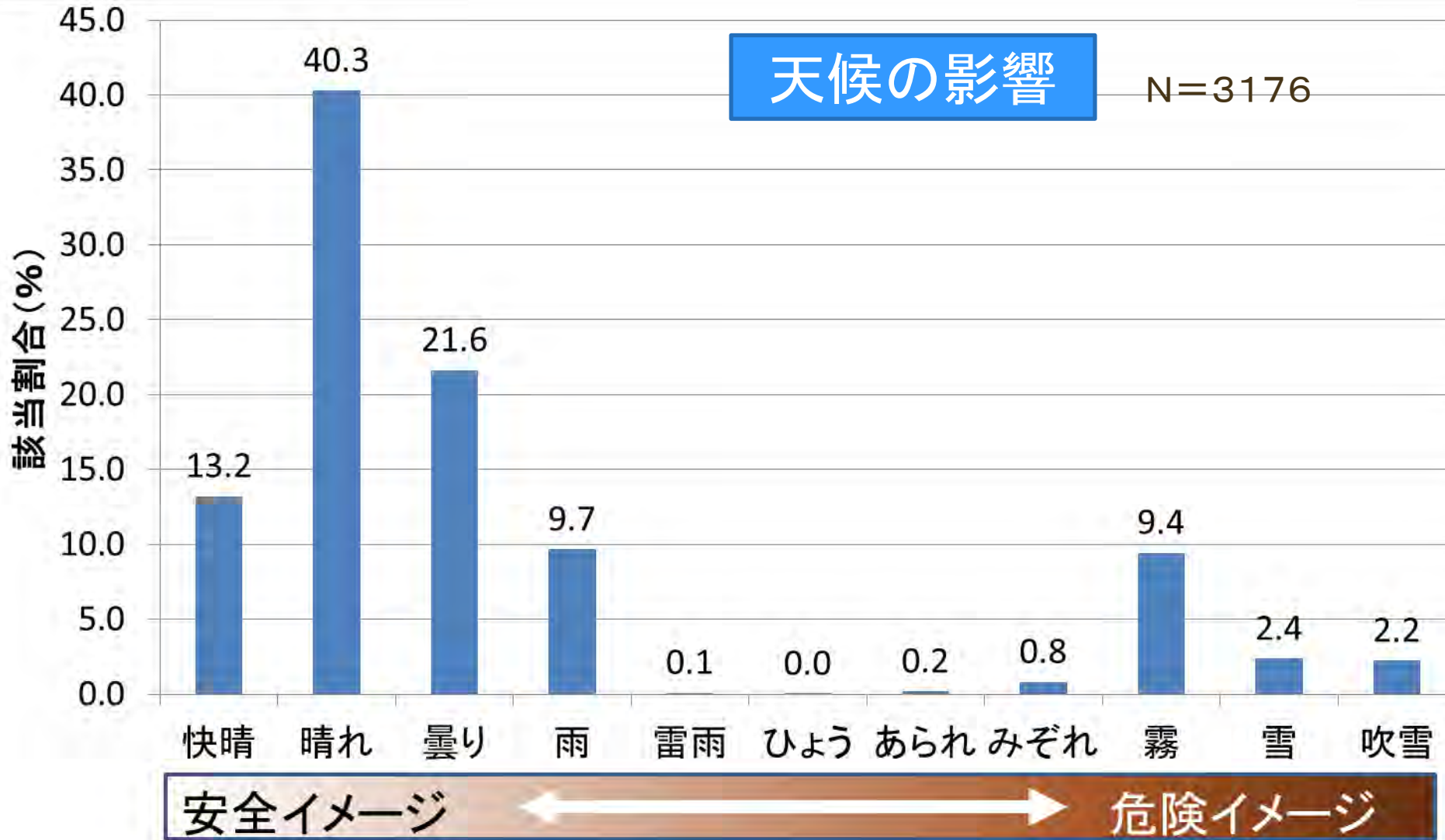
事故データは、その「あたりまえの風景にあるもの」が原因で、転倒し、滑落する事を如実に示している。

その事故データを紹介する。

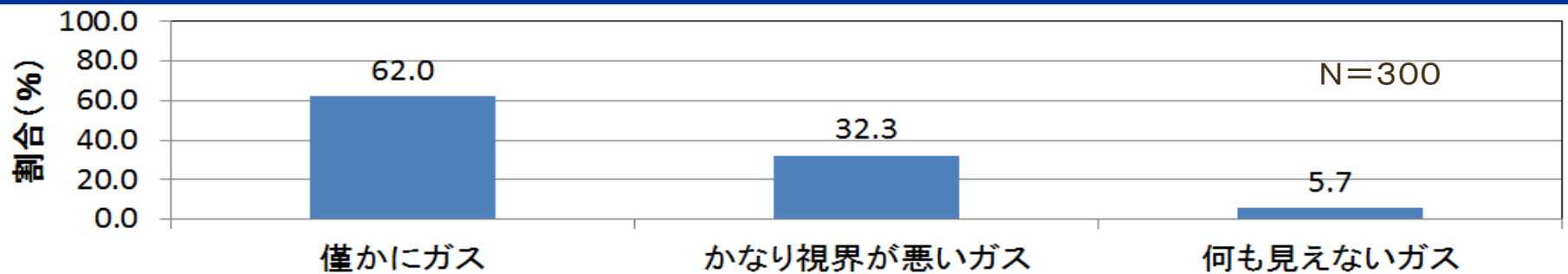
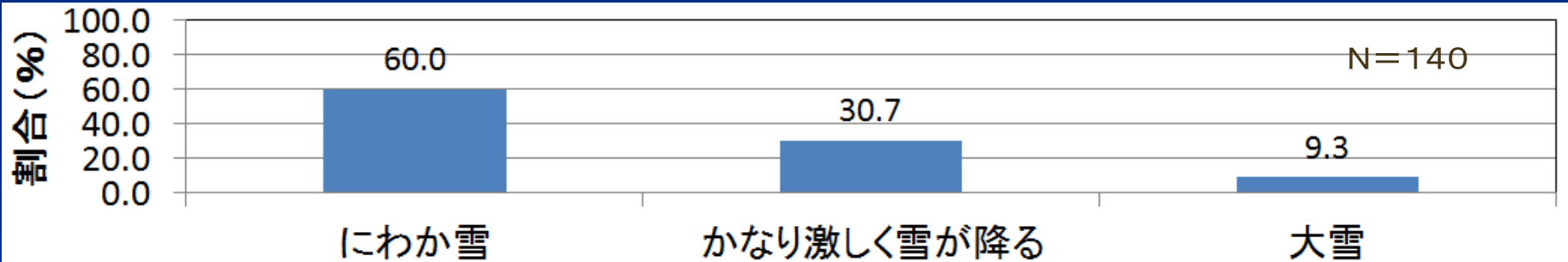
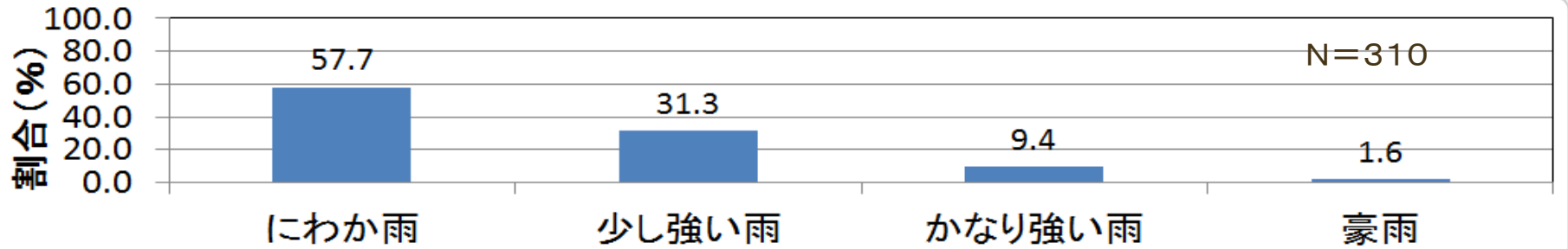
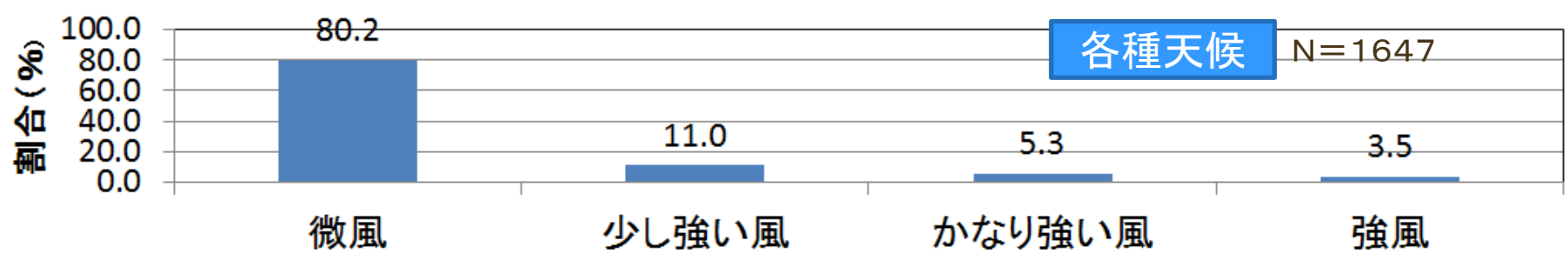


天候の影響

N=3176



事故は、天候が悪いから発生するのではない。

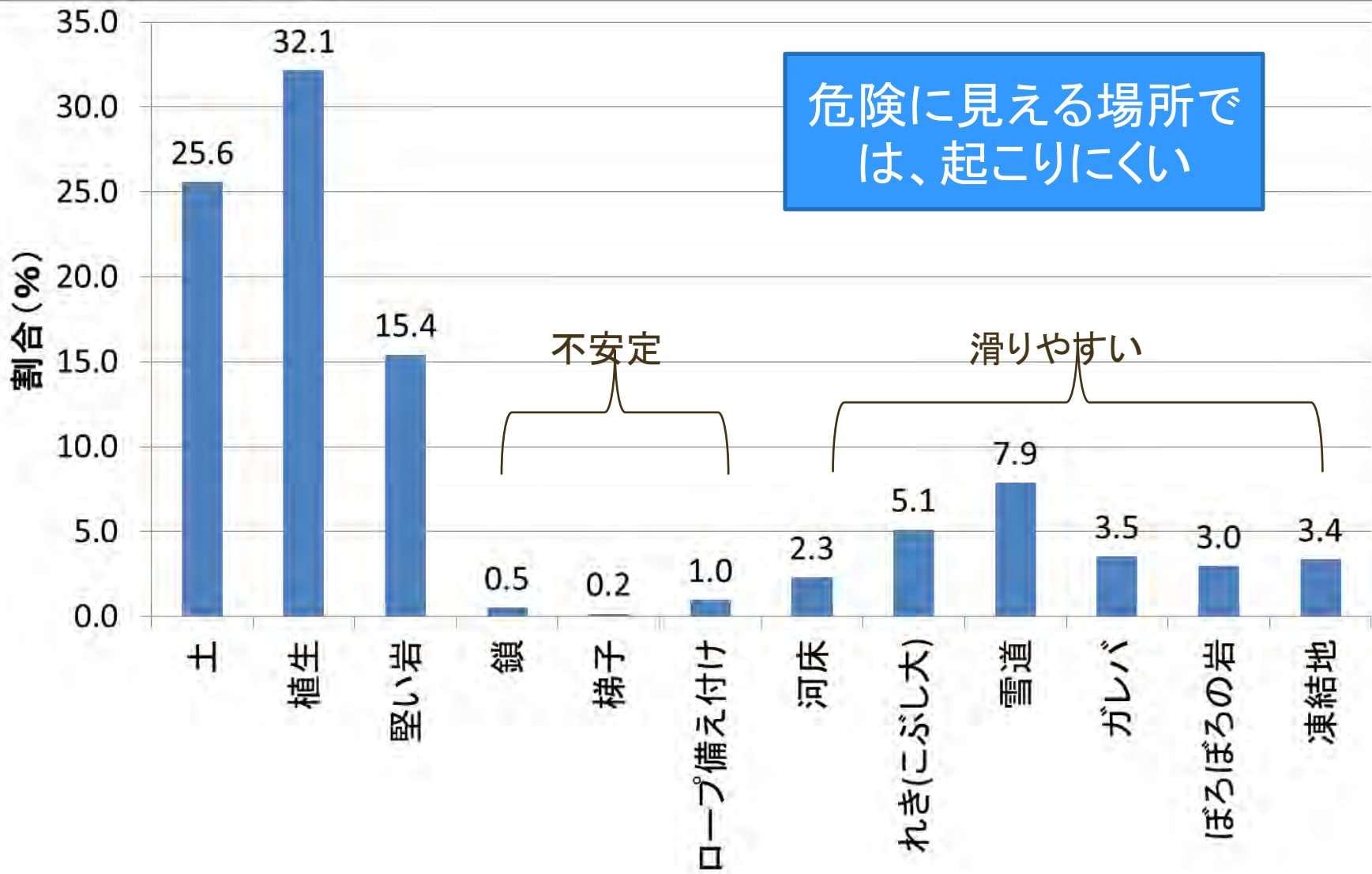


安全イメージ ←



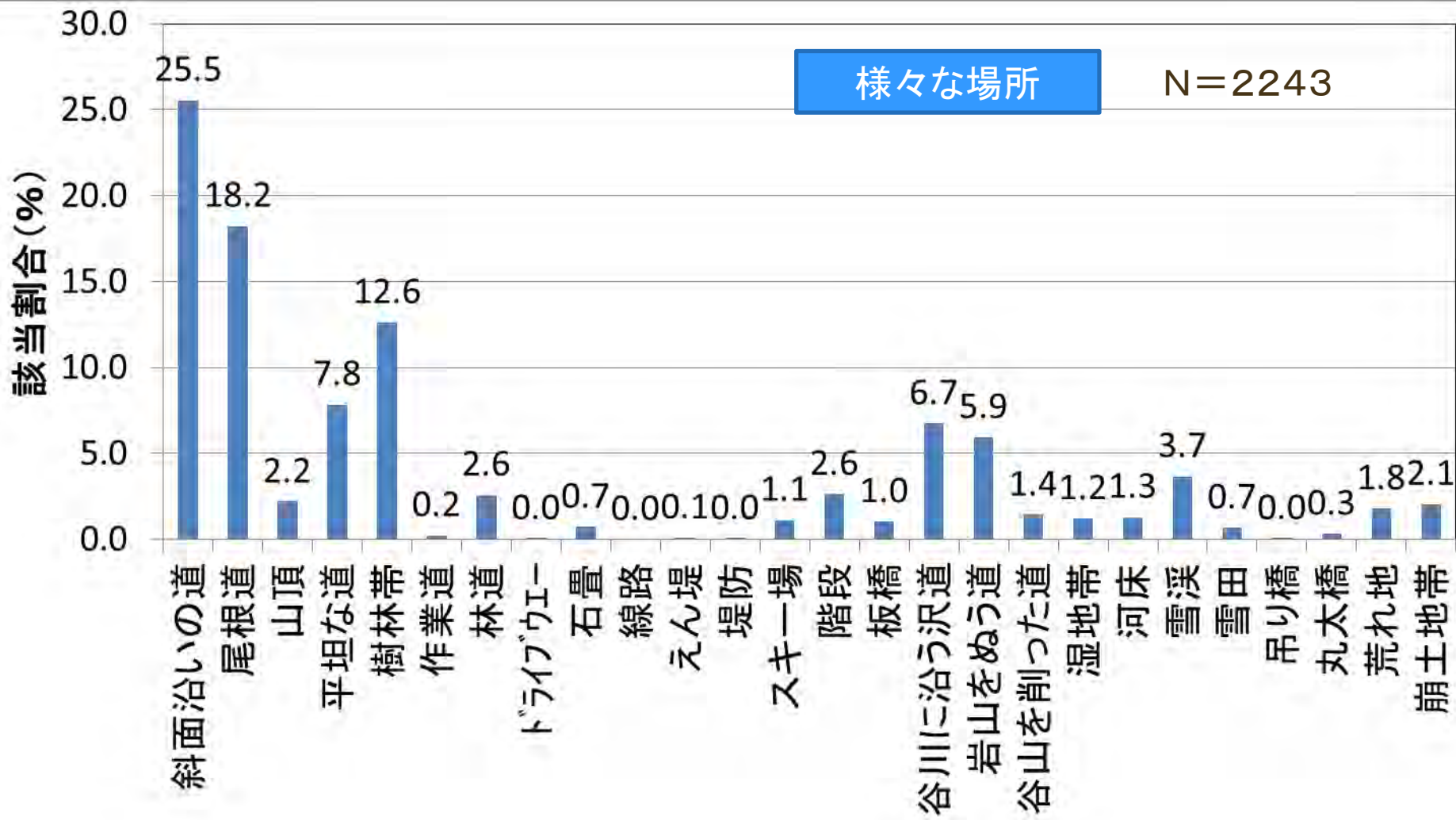
→ 危険イメージ

危険に見える場所では、起こりにくい



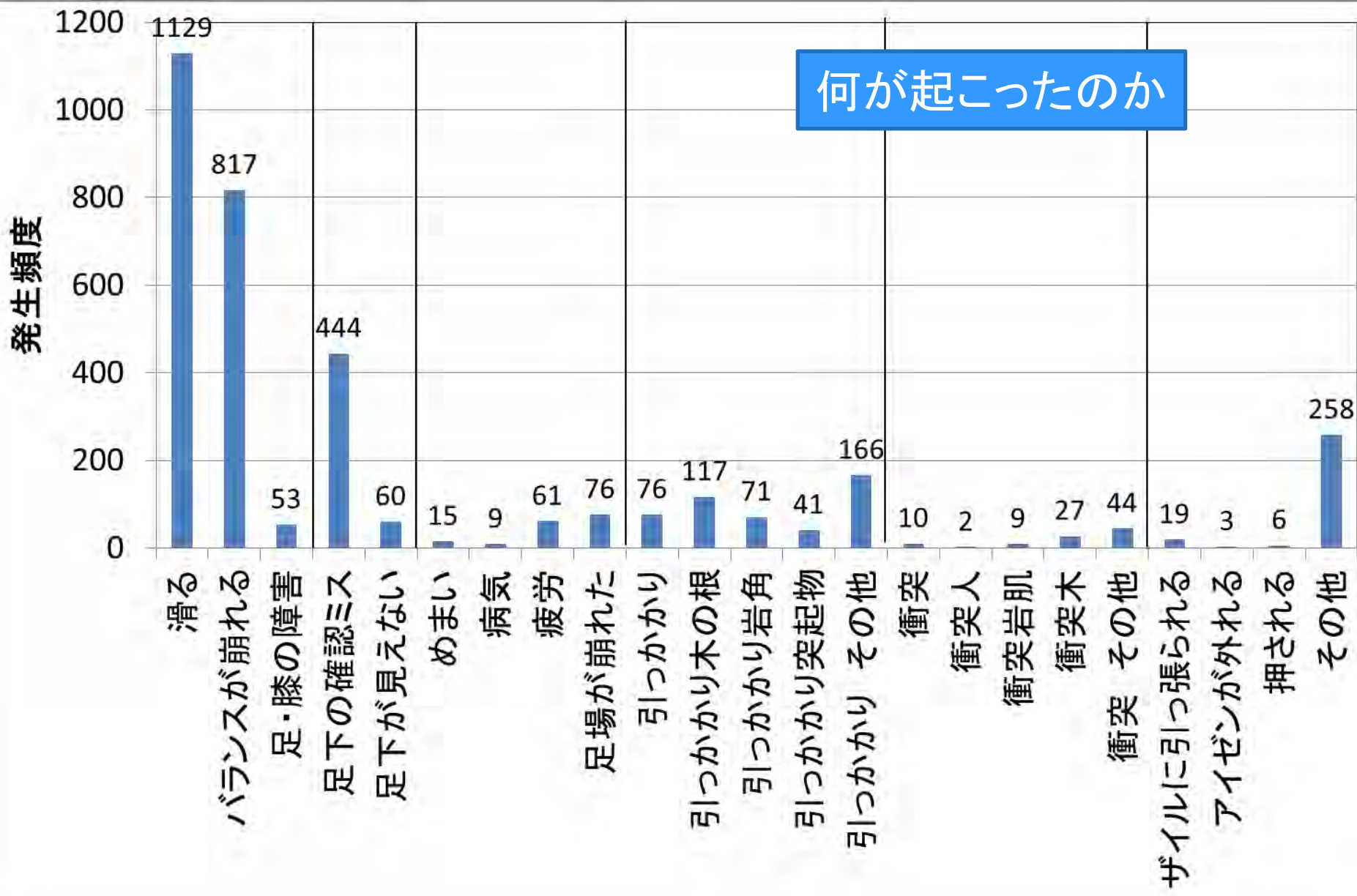
安全イメージ ← → 危険イメージ

滑りやすい、危険な場所で発生する事故は、全体から見れば、ごくわずか

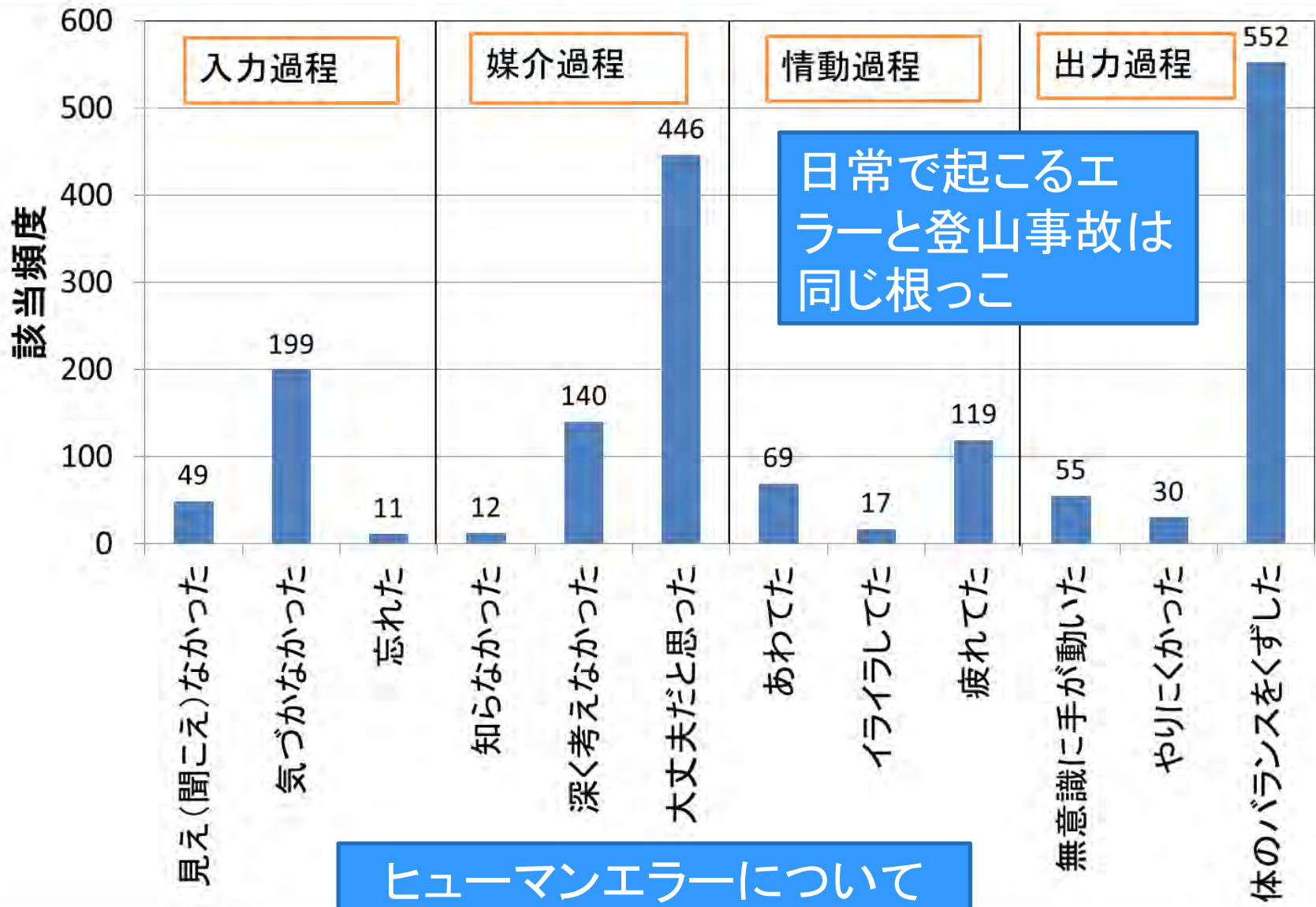


安全イメージ ←

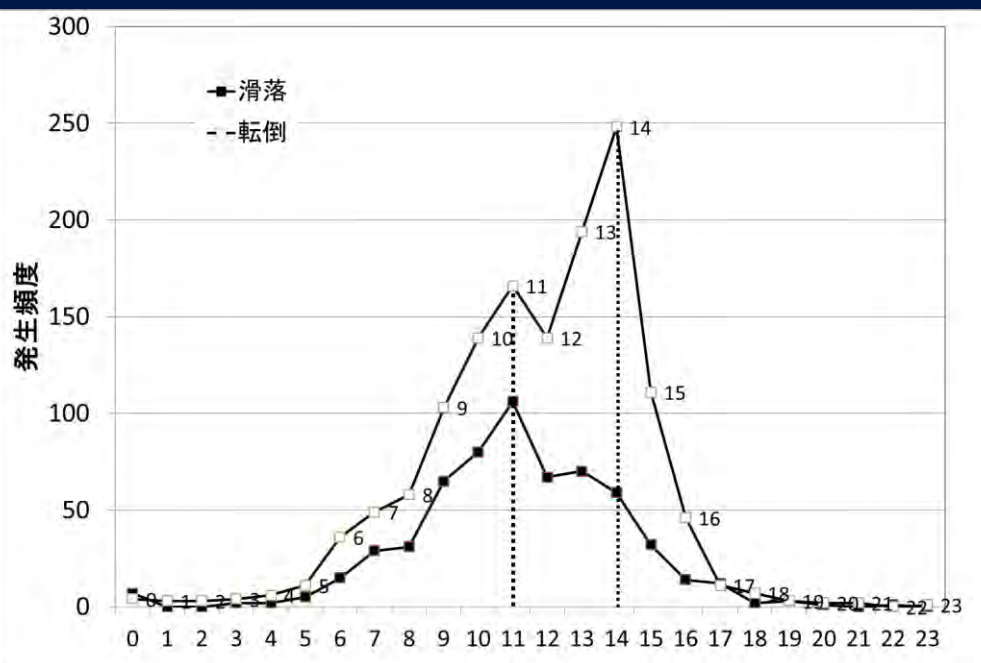
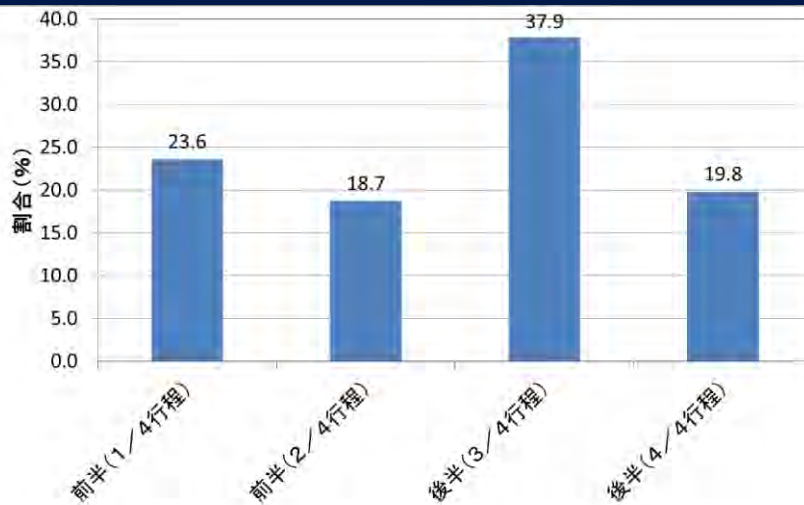
→ 危険イメージ



転倒、滑落の原因となった動作と環境



登山に限らず、様々な領域で発生する事故の約80%がヒューマンエラーによると言われている。登山では、まだ十分に認識されていないおらず、回答が少ない。



疲労度増大 →

登山中の疲れは、時間とともに蓄積する。しかし、事故は最終行程4/4ではなく、3/4工程で、多発する。
疲労より集中力が鍵となる

事故が発生しやすい時間帯は、滑落事故と転倒事故で、異なる2つの時刻がある。滑落の11時、転倒の14時である。

集中力が途切れるやすい時

事故を起こさないために

事故は、一見、何でもない山道に潜むリスクで発生する。 とは言え、常に危険箇所を通過する時のように、注意力を集中し、維持することは難しい。ではどうすれば良いのか。

転倒の原因となるポイントを知り、そこだけを注意しながら歩くことである。木の根、岩角、礫、転ぶと落ちるかもしれない斜面など、ベテランは、一瞬の風景の中に、捉えて歩いている。彼の持つ経験知を広く分かりやすい形で啓発していくことが今後の課題だと思われる。

参考；危険予知トレーニング (KYT)

終わりに

一般の人々の山岳遭難事故イメージが、雪崩、クライミング事故などにあるように、マスコミは反応し、遭対関係者も、木の根に引っかかり転倒したハイキング事故に関心を示さない傾向が強い。

山岳遭難対策は地味な仕事である。幸い、事故データベースは2791データを取り込み、活動の第一線に投入できるところまで成長した。

遭難対策活動とは、何をするとところなのか。どうすれば、減遭難できるのか、具体的な計画の基に話し合わなければならない。

END

